

道 路 小 観 説苑

太 田 正 孝



東京帝大在學時代のことである。

私は、松岡均平博士の交通政策の講議で『わが國には道路がない』といふことを筆記させられた。エライ亂暴なことをいふ先生だとおもつた。——たしかそのころは、やつと本郷の赤門前にマカダムロードを試作中であつたかとおもふ。明治四十二、三年ごろのことである。

大正三年に歐米に出かけて行つて、なるほど松岡さんのいふとほりだなと感じた。ベルリンの光る道——雨夜の水鏡。ロンドンの修復されてゐる道路の厚いこと、パリの放射線の街々。——これが道である。それが路である。

アシダをはいて歩のを輕業のやうに考へてゐる外國人は、あまりにも道と名付けられないところを歩きまわる日本人の器用さに驚いてゐるであらう。

二

關東大震災のときのことである。

當時報知新聞を經營してゐた私は、幸ひにも焼け残つた新聞として、出来るだけの社會奉仕をしてゐた。ある日のことそれは復興局が出来て間もないときであつたが、私は後藤内相によばれて、霞ヶ關の官邸へ行つたことがある。そして、とても眼をまわすやうな何十億圓といふ大きい數字つきの復興計畫の輪郭を話されたことがある。道路、運河、橋梁と、地圖をもつて來さして、こまごまと説明された。話すのは後藤さんだけ、聞くのは私だけ――。

なかに、道路網をつくることのむづかしいわけを話されたとき、私は『そんなに御心配なさるな。私ならこの焼野原で陸軍大演習をやつてみますな。そして、すべてを新しいものにして、理想の線を自由に引いてしまひます!』と申したところが、この思ひ切つた大きな案は、さすがの後藤さんの大風呂敷にもはいりきれなかつたものと見え、すゐぶん驚かれた様子であつた。實は、私は、たしかロシアのピーター大帝が、こゝからこゝへ鐵道をかけよといつて、地圖の上へ線を引いたのが――そのとほり現實となつたといふ昔語りを思ひ出したのである。地圖のうへに書かれた山も川も、紙そのものは低くも高くもない平面にすぎないのである。

失業道路！

これは、産業のために必要だといつて計畫を立てたものを、財政緊縮の立て前から繰延べしたり、中止してしまつたものである。言葉をかへていへば、その繰延中止されたものは、いはば、放漫な道路と見られたのである。

しかし、財政に、經濟に、緊縮政策をとつた結果は、働きたい意思をもつて働く腕に仕事を與へずして、街頭に向つて失業者の洪水を押し出してしまつた。これを救済するために見出されたのが、道路工事である。あるひは河川改修である。それが、いはゆる失業道路と河川とである。

道にかはりはない。凹凸をなほし、一定の幅員のもとにならされた地面に人と物とを通す——それが道路である。道路そのものは、放漫なのではない。また、失業者のためにするものでもない。

四

いひ古るされた言葉として、世界の道はローマに通すといふのがある。——ほんとに、地方へ行つてみると、道路の有難さをしみじみと感する。

私は、諫岡縣の田舎——天龍川の岸で生れ育つた。その選舉區には、東海道筋であるにかゝはらず、少し山奥へはいると、鐵道などはおもひもよらず、愛知縣からはいる方が早いところがある。自動車も通はず、全くの徒步でゆかねばなら

ぬ町もある。奥の奥へはいると、世にもめづらしい名の『辭職峠』といふのがある。駄馬さへあへぐ急坂をのぼつて、峠を越すと、その向ふの山にかこまれた盆地にさゝやかな町があるのであるが、役人は、『ア、またこの峠を越すのか、』いつそやめてしまはうかと、越すために泣く——そこに、『辭職峠』の名が誰いふとなく付けられたのである。

まこと、田舎の人は、文明を廻り道して香を嗅いでゐるのにすぎない！

五

私は、二十年ぢかく大森に住んでゐる。このあたりの道は、早く耕地整理なり、區劃整理に手をつけなかつたため、いやに曲りくねつてゐる。それに、道路が少し堅まつて來たかと思ふと、大粒の石を交へた砂利が敷かれる。それを人と車とで自然にならさすのだ。早い話が、人間をローラー扱ひにしてゐるのである。

ある朝のこと、私の散歩の道に見出したのは、犬の糞である。——しかも、それは平たくならされた道のうへではなくて、大きさに申せば河原といつてよい——砂利のうへに載つてゐることである。かうして、犬さへも道と道でないところを區別してゐるではないか。

× × ×

都といはず、地方といはず、私たちは、道をつくる道を考へやうではないか。

——昭和六・一二・三稿——